

北方四島交流「教育関係者・青少年」訪問事業報告書

富山県黒部市立高志野中学校

教諭 島瀬 武夫

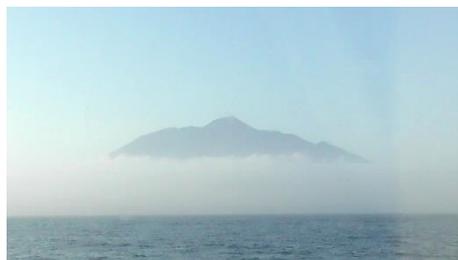
1 はじめに

今回、平成30年度の北方四島交流「教育関係者・青少年」訪問事業に参加する機会をいただき、現地を訪問して現地のロシア人のくらしを見るとともに、日本人が生活していた証をこの目で見る事ができたことは、大変大きな経験となりました。また、今回は、本校生徒を引率するという事で、現地に本県の中学生を同行する事ができたことは、北海道に次いで元島民が暮らす我が県にとっても、大変有意義な機会だったと思います。今回の訪問で、得られた見聞等を簡単にまとめていきたいと思ひます。

2 択捉島訪問

(1) 講話「元島民が語る北方領土」 講師：元島民・択捉島出身 武田 勝三 氏

根室港出港後、国後島古釜布湾での入域手続き後、「えとぴりか」の船窓から北方四島最高峰の爺爺岳が雲の上から覗く中、択捉島出身の武田勝三氏の講話があった。氏は、当時は幼かったため、親類等から聞いた話を織り交ぜながら、当時の思いや、現在の思いについて話して下さった。特に、ソ連兵が侵攻してきた際に、島民たちが女性を守るために男装させたことや、1年間武田氏の家で武田氏の家族とロシア人家族が同居していたことを伺った。知識としては知っていたが、改めて元島民本人から当時の話を聞き、その時の島民が感じた恐怖や戸惑いを生の声として感じる事ができた。



また、昭和22年に強制送還になった際、択捉島～樺太～函館と大変な苦勞をして北海道に帰ってきたことや、青少年期に元島民として周囲から心ない差別を受けたこと、貧しい生活を強いられたこと等を伺い、この70年間に、元島民の方々がどれほどの思いをしてきたのかと考える事ができた。元島民の方々の島に対する思いがただ「帰りたい」という単純な思いではないことを痛感させられた。

(2) 博物館視察

択捉島に到着し、港からは車に分乗して移動をした。バス以外は、全て日本車の中古車であることに驚かされた。私が乗車した車は「ホンダ」の「FIT」で、ダッシュボードに貼ってあった日本語のシールから販売店の試乗車の払い下げであることがうかがえた。運転してくれた女性の話では、ウラジオストク経由で自動車を購入しているようだった。

分乗した車で最初に向かったのは、紗那にある新しくできたスポーツ文化会館の隣にある博物館であった。中には、択捉島の自然や歴史としてアイヌや日本人がかつて使っていた日用品等が展示してあった。また、現在までの交流事業でプレゼントされた日本のお土産も展示してあった。



私は今まで、領土問題の観点から、ロシア側は日本人が生活していた痕跡を捨て去ろうとしているのではと考えていたが、日本の文化や現在までの交流に対して友好的に捉えていることに驚かされた。

(3) 住民交流文化イベント

博物館の見学のあと、スポーツ文化会館で文化交流のイベントを行った。日本から「どろだんご製作キット」や「スーパーボール製作キット」、「塗り絵」を持ち込み、日本側が作り方を教えながら共同して作業をした。島側は、現地の小・中・高校生とその保護者が参加した。私は「塗り絵」を担当したが、どうしても作業に集中してしまうため、なかなか交流とまでは行かなかった。この活動を通して感じたことは、ロシア側の住民が、とても訪問慣れしていることだった。私たち日本側は、ほぼ全員が初めての訪問で緊張していたが、ロシア側は大変慣れっていて、少々冷めた雰囲気を感じた。



(4) 茶話会

文化交流の後、青少年がスポーツ活動を行っている間、教育関係者は、現地住民との懇談会「茶話会」を行った。しかし、なかなか現地の人が集まらず、私が参加した班には、通訳の長年の知り合いである地元新聞社の元女性編集者1人とくらしや文化の違いについて話し合った。その中で特に印象に残ったのは、ロシアの年金制度についてである。ロシアの年金制度は、女性が大変優遇されており、子どもを3人出産すれば年金額が上がり、5人以上出産すれば「英雄の母」としてたたえられること、女性の社会進出に対して社会制度が整っている。これは、少子化対策で、同じく少子化を迎えている日本にとって、参考になる政策だと感じた。

(5) 別飛日本人墓地の墓参

午後からは、別飛方面へ車で移動した。道路事情については、昔から見れば大変向上しているらしく、別飛への道路は舗装され、途中に空港も整備されていた。しかし、日本人墓地がある周辺は、全く道路が舗装されておらず、橋もまともに架かっていない状態で、鉄板だけが敷いてあった。現地の人の車のほとんどが4WDのパジェロやランクルである理由がよく分かった。

別飛の日本人墓地は、あまり整理されておらず、囲はしてあるものの少々もの悲しさを感じた。

(6) 「クリリスキー・ルイバク」水産加工場見学

墓参の後、「クリリスキー・ルイバク」水産加工場を見学した。工場は大変広く、従業員も若者を中心にとくさんいることに驚かされた。訪問した日は、加工作業が行われていなかったため、実際の加工の様子は分からないが、工場の規模から相当量の生産力があると感じられた。しかし、職員のトイレを借りた際、その粗末さに驚かされた。日本でいえば今から40年ほど前のトイレを思わせる状態だった。工場内の設備に対して労働環境はそんなによくないのではと感じた。ただし、従業員の表情は明るかった。



(7) 紗那日本人墓地の墓参

訪問2日目は、まず紗那の日本人墓地を墓参した。紗那の村を見渡せる小高い丘にあり、現在は、ロシア人の墓地となっていた。日本人の墓はロシア人の墓に混じって保存されていた。墓の墓標を見ると「明治」「大正」「昭和」の年号が刻まれており、戦前まで、確かにこの地で多くの日本人が暮らしていたことを実感することができた。墓標の中には、享年2歳と彫られているものもあり、当時は、厳しい環境の中で、生活していたことをうかがい知ることができた。



(8) 紗那下街散策

墓参後は、紗那の旧市街を散策した。かつて日本人が住んでいたころの街の中心部だったが、日本人が生活した面影は感じられなかった。建物で当時の建物で残っているのは旧学校だけだった。特に、日本が保存を望んでいた旧郵便局の建物も解体され、空き地になっていた。旧市街はロシア化が進んでおり、新しくロシアの戦勝記念碑も建てられていた。そんな中、ロシア正教の教会に、戦前にその地にあった神社の灯籠の土台が残っていた。

(9) 紗那川孵化工場見学

市街散策後は、紗那川の孵化工場を見学した。この規模は大変大きく、目を見張るものがあった。ただし、この孵化場には、戦前に日本がつくった孵化場の土台をそのまま使っている建物もあり、70年以上たった土台が今もなお使われていることに、戦前の日本の建築技術の素晴らしさを感じることができた。孵化場横の川では、とても多くの鮭が飼育されており、その豊かさに驚かされた。



(10) ホームビジット

午後からは、ロシア人家庭を班ごとに分かれて訪れるホームビジットを行った。私は、同行した中学生1名と男性教員2名の計4名で、地区中央病院の女医のボロジナ・リュボーフィ・イワノヴナさんのお宅を訪問した。ロシアでは全く英語教育をしておらず、学校教育で普通に英語を学習している私たちにとっては大変驚かされた。大学生の娘さんもいたが、そちらも英語は話せなかった。ご主人や3人娘の上と下はロシア本土で生活しており、ボロジナさんも仕事で択捉に赴任してきたとのことだった。娘さんは、大学の休みを使って島の水産加工場でアルバイトをするために来ていることが分かった。ボロジナさんが、3人の娘がまだ誰も結婚しておらず、52歳なのに孫が一人いないことを嘆いていた。ロシアでは、女性が早く結婚して、たくさん子どもをもうけることが美德とされており、そのために年金制度等が保障されていることを教えてもらった。また、女性の社会進出にも理解があり、働きながら子育てをする仕組みが整えられているとのことだった。

テーブルには、ボールに大量のいくらが入れてあり、横にクレープの皮が焼かれてあった。現地では、クレープの皮にいくらを巻いて食べるそうで、最初は戸惑ったが、食べてみるとなかなかの味だった。このいくらは、現在の択捉島では、一番のもてなしの品になっているようであった。



3 終わりに

今回のビザなし交流を通して、現地をこの目で見ることにより、知識しかなかった北方領土問題について深く考えさせられた。

根室帰港後、同行の生徒をともなって、返還要求の地「納沙布岬」を訪れた。この日は天候がよく、納沙布岬から貝殻島の灯台や水晶島がはっきり見えた。ここで、北方領土資料館を見学した際、展示してある写真に思わず目がとまった。その写真には、日本人の子どもを笑顔で抱っこするロシア人の姿や、将棋をする日本人とロシア人の姿が映っていた。わずか1年だったけれども間違いなく島で日本人とロシア人がともに暮らした証がそこにあった。この写真を見て、返還要求運動を続けていくことの大切さを改めて感じた。

帰り際、ふと四島の架け橋を見ると横にうっすらと爺爺岳が浮かんで見えた。その姿を見ながら、日本人の生活をする場として島は大切であり、運動を進めていくためにも、まず、地元の富山県の子どもたちに北方領土に伝えていかなければと思いを新たにしました。

最後に、このような貴重な体験をする機会を与えてくださった北方領土対策協会並びに北方領土返還要求運動富山県民会議、そして、本県中学生のビザなし交流事業派遣に尽力くださった大野久芳黒部市長に深く感謝いたします。

